



同姓同名

熊本大学の北村裕介先生からバトンを引き継ぎました産業技術総合研究所の加藤大と申します。北村先生とは同じ大学出身で、研究室は違いましたが、同時期に大学院に在籍し、さまざまな場面（博士学生の集い、居酒屋、サッカー）でよく一緒させて頂きました。それから20年近く経った現在、同じ日本分析化学会に所属し、こんなに長いお付き合いになるとは当時は考えてもみませんでした。私は大学院までは、高分子の研究室に所属し、ポリアミノ酸（修士課程）やポリシロキサン（博士課程）の合成に取り組んでいました。ポリシロキサンを超薄膜化し選択透過膜として評価することになり、電気化学分析を勉強するため、当時産総研におられた水谷文雄先生（兵庫県立大名誉教授）、丹羽修先生（現 埼玉工業大教授）にご指導を頂きました。これらの巡り合いがきっかけとなり、現在は電気化学分析のためのナノカーボン電極材料の研究を主軸としています。これまで一貫して材料研究に携わってきましたが、参加する学会が徐々に日本分析化学会へシフトしていきます。

日本分析化学会に入会して間もない頃、本エッセイのタイトルでもある「同姓同名」に関する出来事に直面しました。まず、日本分析化学会では、すでに加藤大先生が活躍されていることを知りました。ある機器メーカーの方から、「〇〇（外部予算の名前）、おめでとうございます！」と祝福メールを頂いたことがきっかけでした。身に覚えがなく、調べて納得。誤爆メール。また、入会間もない若手の頃に参加した学会で、自身のポスター前で待機していると、「あれ、違う人が立っている」と、よく言われました。そのあたりから加藤大先生（まさる）のことが気になって仕方がなくなりました。発表論文も拝読させて頂きました。論文を読んでさらに納得。当時両者ともナノカーボンを扱っていたことも重なったの現象と考察しました。このような論文読み漁りの衝動や動機、皆さんにもありますか？ 不思議なことに、時を経ても取り違いがなくなることはありません。現在でもコンスタントに発生します。2021年も2回取り違いがありましたが、慣れたもので冷静に対処できました。いやいや、これはセルフプロデュースが下手なのだと反省しなくてははいけません。国内の研究発表の時は名前にルビを振るという、ささやかアピールはしています。

加藤大とweb検索すると、同姓同名のサッカー選手、野球選手、ダイエットで著名な方がヒットします。母集

団が研究者である KAKEN データベースや researchmap で検索すると、加藤大で始まる研究者が自身を含め30名ほどヒットします。勝手ながら親近感を覚える方々です。いつか共著で論文書きたい妄想に駆られたりします。一方で、この同姓同名問題（名寄せ問題と呼ぶ場合もあります）には深刻化する側面もあります。中国の研究コミュニティでは、日本以上に同姓同名問題が多く、中国の研究者の論文が加速度的に増加してきた2000年頃から問題視されているようです。さらに、この問題を悪用した事例もありました。苗字もイニシャルも同じ他人の論文を使って履歴書を水増ししていた事例が Nature 誌で紹介されています¹⁾。実際に、国際会議で知り合った中国の大学の A 先生からお聞きした話で、大学の任期審査に臨む同姓・同イニシャルの B 先生が、業績リストに A 先生の業績を巧みに混ぜ込んでいたそうです。引用文献形式でファーストネームをイニシャル（私の場合、D. Kato）で記載してしまうと、拍車をかけて識別困難になります。A 先生は、同じ大学内（研究分野も少し近い）であってもこのような問題が起きた状況を危惧されていました。

現在は、研究者のマイナンバーともいべき ORCID などで個人の業績が正確に公開されるようになったと実感しています。私自身、researchmap を利用し始めた当初は、データ取り込み時に論文マシマシの業績リストが提示されてしまい、修正に労力がかかるため公開していませんでした。本システムが科研費審査に利用されるようになったタイミングで意を決して業績リストを念入りに確認、水増し分を間引いた記憶があります。現在では AI が導入されデータ学習によって正しい成果だけが業績リストに追加されるので、かなり便利になりました。

今回は、昭和大学の加藤大先生にお願いしました。歴史あるリレーエッセイですが、一度くらい同姓同名のご縁でつないでもよいのではという、私のワガママに対して快くバトンを受けとって頂きました。学会会場で「代わりに座長してくれてもいいよ」といった同姓同名トークをさせて頂いたことが強く印象に残っています。加藤大先生ありがとうございます。そしてぶんせき編集委員の皆様、校閲がややこしくて申し訳ございません。

1) J. Qiu : *Nature*, **451**, 766 (2008).

[産業技術総合研究所 加藤 大]